
響奏のレコンキスタ -Avenger on the A- est

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

響奏のレコンキスタ - Avenger on the A -

【Nコード】

N7342A

【作者名】

est

【あらすじ】

魔術と工学技術が高度に融合した近未来。苦悩、葛藤、憎悪、悔恨を土壌に日常が非日常へと変貌していく群像劇。過去を思ふ少年と未来を望まない少女の物語。

第0話 Prologue

血をぶち撒けたような空。

手を伸ばそうとして、諦める。届くはずのない無限遠の色彩が、網膜にその美しさを訴えかけてくる。

いつか見たあの日の空と酷似する風景。風はなく音もない、世界のすべてが秒針を止めたような停止した美しさ。

諦めるな。それが、彼の口癖だった。

ひたすら、ただひたすら前へと進まなければならない。前進をやめれば地へと落ちてしまうからだ。

心を硬く内へと閉じ込めて進んできて、それでも少女は至ることができなかった。

悔しい、と少女は思う。何もかもを置き去りにしてまで進み続けて、それでも少女には辿り着くことができなかったのだから。

それなのに涙は出ない。悲しいし悔しいし、声をあげて泣きたい気分なのに泣くことはできない。

『終幕のときだ、リズ』

「まだ、よ」

視界の端で子供が語りかけてくる。甘い囁きに屈しそうな心を捻じ曲げて、少女は立ち上がる。頭の中をかき回されるような痛覚に歯を食いしばりながら、手足に力を込めて。

地獄を思わせる焦土の広がりの方、世界は理不尽な終焉を遂げようとしている。

世界は汚物にまみれて、人は泥濘に生きている。

すべてを消してしまえばきれいになる。当然の帰結だがそこには

空虚しか残らないだろう。

憎悪と汚穢を除くことは不可能に近い。人の営みが生み出す中には、矛盾や汚点は無数に含まれている。

それでも、すべては尊いのだ。それを否定する権利は、誰にもない。

「私は、あきらめない」

流れでる深紅が土へと浸み込んでいく。幕切れまでの残り少ない時間、少女は命を主張し続けることを改めて決意する。

すべてが終わろうとする今だからこそ果たさなければならぬ生命の義務。

憎悪の中心で生存を選択するのが、少女の生まれてきた理由なのだから。

怨嗟と憎悪に満ち足りた世界に人は産み落とされる。

負の感情の海原に放り出された少女は自己を環境に適応させ、今のときまでを生きてきた。

世界は可能性にあふれている。何もなかった少女をこれほどまでに充足に至らせたのだ。できないことなど、何もない。

遙か前方、彼はまだ戦っている。

体はもうぼろぼろで、今にもくず折れそうな体を奮い立たせて。この瞬間を『彼』は臆することもなく前進しているのだ。

私とは違う。彼は強い。少女は、そう思う。

私も、そうになりたい。だから、私はまた立ち上がることができるのだ。少女は、そう思う。

手を伸ばす。

未来を掴み取るために。

《確率干渉係数臨界値に到達。保護システム起動により『賛歌』を
顕現します》

響奏のレコンキスタ - A v e n g e r o n t h e A -

第0話 Prologue（後書き）

旧作「朱ノ月 - ruin and eclipse -」を再度改稿した作品です。お付き合い頂ける奇遇な方、おられましたら読んでやってください。

第1話 前夜 - よかん -

なぜこのような事態になったのか。瓦礫の下で息をひそめながら、少女はそう思い、溜息をひとつついた。

招かれざる来客が来てから七分、彼女が優雅な時間を過ごしていた邸宅は残骸へと変貌した。戦闘ヘリから放たれた成型炸薬弾^{ヘルファイア}二発はハリウッド映画よろしく住宅の七割を吹き飛ばし、休日の午後を楽しんでいただろう近隣住民を二秒半で建物ごと木端微塵にした。

冬には暖かい火を灯していた暖炉や毎朝毎晩風景と紅茶を楽しんでいたバルコニーも粉々になり、知人から借りていた本も恐らくは原形を留めていないだろう。

そこまではまだよかった。だが、火力による制圧は少女だけを対象にしているわけではなく、迫撃砲による砲弾の豪雨を受けて閑静な住宅街であつたはずの近隣はその光景を平たくしてしまった。

基礎となる建材を避けて隙間ができるだろう位置を推測して身をかめたのが功を奏し、軽い擦り傷切り傷と打ち身を除いて致命的な負傷はない。残骸に身を隠して少女は前方へと目を向ける。

突撃銃を携行する戦闘員六名。掃討を担当する一個分隊と判断。分隊指揮官と思われる後方の一人が無線で本部からの指揮を仰いでいる。

僅かなうめき声が響く隙間へと銃口を定めて引鉄を引く。銃声が響いたきり、声は止む。ありきたりな掃討の様子を観察し、少女は誰かが近付くのを待ち続けた。

数発の銃声が止み、足音が破片を踏み砕く音が近付いてきた。粉塵がまだ立つ瓦礫の上、ゆらりと少女は瓦礫から歩み出、静かに兵を冷たく睥睨した。彼女に胸の高鳴りはない。ひどく静かに、一定の拍動を刻むのみ。冷静な自分自身を音を確認しながら、少女は保有している《詩》を紡いだ。

「黒き湖に睡りし名伏し難きものよ。聖絶の名を与えられし我が

命ず 》」

幼さこそ残るものの極上と言えるだろうソプラノが奏でた言葉。その声に反応した銃口が向けられる。だが、少女の詩はそれよりも速かった。

「《 隔てよ 》」

一斉に銃口が向けられ、兵士の引鉄ひきがねに力が込められ。

しかし銃声はない。熱せられた飴細工のように銃身が捻じ曲げられていた。

空間がねじ曲がる 大氣中に飽和し析出した魔力子マナによる光の屈折 蜘蛛の巣に絡め取られた屑虫のように銃弾が宙に浮き止まる。

少女の中で産声を挙げたのは明確な意思だった。目前に立つ木偶を細切れにするという、彼女にとってみれば極めて容易い行動だった。

「《風は澄まされ刃と為る》」

最も近い場所にいた男に線が走る。不可視無音の刃が一人の人間を細切れに変換した。赤い飛沫をあげてばらばらと崩れていくと同時、即座に他の隊員が近接戦闘用の自動拳銃を照準する。安全装置が解除され、引鉄が引かれる。

銃声。銃弾が少女に殺到。

至近距離から放たれた9ミリ弾は少女の皮膚を突き破り、蹂躪し、その命を奪うはずであった。

だが、血は流れない。幼さの残るソプラノが悲鳴を空に響かせることもない。代わりに、甲高い金属音で銃弾は弾かれるようにして軌道を変え、瓦礫へと着弾する。

それまで仮面のような無表情だった少女がようやく笑みを見せた。銃と血と亡骸で組み上げられた今の状況において少女のその聖者もしくは天使じみた笑顔は、あまりにも乖離していた。この状況でありにも自然な微笑をたたえる少女のその表情は、圧倒的戦力差とともに制圧班を構成していた戦闘員へ恐怖を刻み込むには十分すぎ

た。

恐怖がもたらす選択はほとんどの場合、二つに限定される。恐怖からの逃走か、あるいは恐怖への反撃か。彼らは精強であるがために、後者を選択するという過ちを犯した。

少女に最も近い位置にいた隊員が近接格闘用のアーミーナイフを抜き、スプリンターを思わせる力強い助走によって十分な速度を得て、腹へナイフを突き出した。少女の位置から見て後方に位置する隊員は銃口を少女へ向けたまま引き金を絞るタイミングをはかっている。

哀れだと、少女は一抹の憐憫を隊員へと向けた。何の疑いもなく彼は自分を殺すために刃を抜き、こちらへと近付いてくるのだ。

「《四大が一つを統べし王よ。我が命ず》」

あくまで穏やかな死刑宣告が朗読される。半狂乱に陥った男たちの耳に、最期の言葉が静かに、響いた。

「《爆ぜよ》」

弔詞を読むような静かな声に覆い被さるようにして、水風船を割るような音が響いた。どこにも隊員の姿は見当たらないが、赤と白とその他の色を混じらせたミンチが瓦礫にこびりついている。

そこからは数秒だった。戦意を失っているにも関わらず恐怖に思考を占領された戦闘のプロフェッショナルは声と判別することも難しいような叫び声を挙げて少女の命を断とうとし、断末魔もなく消えてなくなった。

鉄の悪臭と血肉のカーペットが敷き詰められたのを確認して、少女はため息をついた。これでまた、しばらく血の臭いが取れなくなってしまうと少しだけ憂鬱になる。

自分の置かれた状況を再度少女は分析していた。制圧に向かっていただろう分隊からの連絡が途絶えた今、別動隊が現状を確認するためこちらへと近付いてくる可能性が極めて高い。幸い掃討は今も続いているらしく四方から銃声は響いており、通信途絶以外に異常

を察知させる要素は見られないだろう。

いかに戦闘力で上回っているとはいえ、密集すれば事の運びが面倒になる可能性もある。この場を離脱して包囲前の少ない戦力を突破しつつ次の行動を模索することを決定し、少女は走り出した。

目指すのは聖堂都市として名高いユークロニア首都、キサナドゥ。魔術師たちを統べる【学院】の中樞都市だ。

太古の遺跡群をそのまま利用した聖堂都市に程近い一本道。息の乱れを感じながら瓦礫の散らばる石畳を疾走する。

人影はない。人であったものはそこら中にある。理性の働かない兵隊に食い散らかされた残骸が撒き散らかされている。

血臭に眉をひそめながらも少女は走り続けた。遭遇した歩兵も彼女の後ろに赤くて柔らかいカーペットとなっていた。苦痛を感じる間もなかったのがせめてもの幸いだろう。

そうして、辿り着く。

大理石に似た、トレヴィイの泉を思わせる白い階段を駆け上がる。休日には市民の憩いの場としても機能していた建築物も、今となっては墓標のようにさえ見える。

ゴシック調の重厚な意匠を施された大聖堂の扉を押し開けると、純白のローブを纏う禿頭の初老が立っていた。優しいな微笑みを浮かべながらリゼルを見て軽い会釈をし、

「……こうも遅れるとは貴女らしくもない。道に迷ったのですか？」
「からかわないでくださいデメティウス司教、状況を教えていただけませんか？」

禿頭の初老　デメティウス司教は開いていた分厚い本の表紙を優しく閉じ、優しい微笑みを浮かべて語りかける。

「マンスフィールド騎士団長のクーデターにNATOが呼応したのでしょうか。幸いこの聖堂を守護する魔術は猊下^{げいか}のお墨付きですから発見すらされていません」

ウィリアム・マンスフィールド騎士団長。高慢ながらも采配の良さと辣腕で知られる学院の教官だ。母国である英国との結託を讒言されて諮問委員会が設けられ、騎士団長の座から転げ落ちるのも時間の問題とささやかれていた魔術師だった。確かに利己主義や保身に走って造反を企む理由は十分にある。

キサナドウの大聖堂に施された彫刻の文様は賢哲^{サウアン}として名高い大神父が施した魔術因子だ。人間の認識を司る数値である閾値^{いきち}を改竄し、あらゆる観測手段から発見を免れる高い階位の認識迷彩を定義されている。この大聖堂を実在するものとして認識できるのは初めからこの建造物の存在を認識しており、さらには定義された認識迷彩よりも高い観測魔術を扱える魔術師のみだ。

「実働部隊として都市を制圧しているのは聖堂騎士団一個連隊と強化装備を適用された作戦連合部隊、純粋な魔術戦闘でなければ一介の魔術師が敵う相手ではないでしょう。加えて指揮を執る人間が魔術を熟知している以上、極めて状況は不利。既に勝敗は決したも同然ということです」

諭すように言うデメティウスの表情はあくまで穏やかだ。

「容易く叩き潰せる相手を前に、逃げると仰るのですか？」

「貴女が叩き潰そう相手は、まだその手足さえもこちらに見せていない。吐息を吹きかけられているようなものです。いくら貴女が殺戮を得意としていようと、吐息を相手に鉄槌を振り降ろせますか？」

「ならば、司教はこのままこの状態を見過^くせと仰るのですね。このままいいように蹂躪されるのを、おめおめと観ていると 本当にそう仰るのですか？」

声音こそ平静を装っていたが、少女は憤っていた。穏やかに見える表情の中で、蒼い瞳だけが怒りの炎を燃え上がらせていた。

「歯車はしっかりと噛み合ったまま、間違っことなく動いています。」

この侵攻も当然の帰結なのですよ」

穏やかで、それゆえに冷淡でさえあった。介入の余地を許さない
断定の言葉に、少女の表情が哀に歪む。

泣きじゃくる子供に語りかけるような表情で、デメティウスは語
りかけた。

「そして《断界》^{アナテマ}の贈り名を持つ魔術師よ。貴女が向かうべきは貴
女が懐かしむ極東の地です。貴女はいずれその地へ赴くことを求め、
その地もまた貴女の来訪を切望するようになるでしょう。貴女の望
むであろう結末が、その地に眠っています」

昔のことを少しだけ思い出した少女は頭を振った。過去の悪い夢
を振り払うように。自分の非力が招いた惨劇を、救えなかった友人
の最期を、その脳裏に蘇らせないように。

「既に他の王は件の地^{くだん}に向かいました。大図書館^{ブッバルト}は言葉こそ嫌悪を
露わにしましたが、最もあの地に悔いを残した魔術師ですから。
そして貴女もそうでしょう？ リゼリア・セルバレルよ」

名を呼ばれた少女 リゼリア・セルバレルはため息をついた。
デメティウスの言葉は何一つ間違っていない。この都市を滅ぼそう
とする何者かを皆殺しにするよりも因縁の地に向かうことを、何の
迷いもなく選んでいた自分への自嘲だった。

「……わかりました」

一息を置いて、少女は重々しく首肯した。満足げに微笑んだデメ
ティウスが書物の頁をめくると同時、淡く穏やかな魔力光が息づく
ように灯される。

「人形師が残した機龍が鐘楼に眠っています。それを使えば数時間
とせずとも海を超えることはできるでしょう」

そう言ってデメティウスが少女に渡したのは、大人の男の拳大に
もなる巨大な宝石だった。

「ありがとうございます、司教」

感謝の言葉にデメティウスは、穏やかに、笑った。

「貴女の明日が、光に満たされんことを」

第1話 前夜 - よかん - (後書き)

非常にマイペースに更新していく予定です。ゆったりと読み進めていただければ幸い。
感想評価、力になります。

幕間 1 - A

限りなく闇に近い空間がある。風はなく、ただ、音がある。

一定の拍を刻む、齒車の音。

がちり、がちり。がちり、がちり、鳴り響くその音だけが広がる
広大な空間にに高らかな　　きわめて明朗な声が鳴り響く。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」

宣言にも似た声。声の主は西洋貴族を思わせる絢爛豪華な装束を
まとった男だった。

「　　今宵この場へとお集まり頂いた聴衆の皆様。こたびの一時に
て、我らは彼の地を掌握致しました」

勇壮なまでに雄々しいテノールと共鳴するのは、巨大な齒車が軋
む音だった。高らかな勝利の宣言と、がちり、がちり、という音を
立てて噛み合う無数の齒車が男の身なりと重なり合い、前衛芸術を
思わせる一枚の【絵】となっている。

国会議事堂地下九一二メートルに掘られた空洞。外部からの接触
を絶たれた巨大な空間　　その存在を知るものは、この国の政治に
携わる者でさえ一部に限られる。この国で宰相を務めた者でさえ、
この劇場を知ることなく任期を終えることがあった。歌劇を楽しむ
劇場のようにして設けられた数多くの座席には数多くの人々が座し

ている。

その空間にあるのは劇場と、多くの巨大な歯車。がちり、がちり。正確に音を刻み続ける。

壇上に立つ男の言葉が止むことはない。

「哀れなことに賢哲の名を戴く傲岸な愚者らは、我らに剣の切っ先を向けようとしております」

賢哲という言葉に客席はざわめいた。学院でも極めて高い階位に君臨する魔術師。四大の石柱を下僕にする者、世界全ての魔導書を保有する者、怪異をさながら呼吸をするように討ち滅ぼす者。どれも一つの国家を根底から覆すだけの力を持つ規格外の魔術師だ。

堂々とした威風を纏い、しかし自らが紡ぐ言葉に耽溺しながら、男は力強く宣言する。

「しかし懸念は必要ありません。数字の獣は我らが許に集もいました、いずれも諸侯に劣らぬ力を振るいましょう。加えて更に強大な力を持った者も、我らがために剣を執ることを誓いました」

壇上で笑顔をこぼす男とは対照的に観客達にはざわめきが広がっていく。その様に満ちたように頷き、男は更に笑みを濃くした。

「まずは序曲をお楽しみください。白銀の獣の羽ばたきが夏の空を真冬へと誘いましょう。浅くはありますが美しい調べであります。」

大仰と言っているほどの深い一礼とともに、男は聴衆へ笑いかけた。

「数年の隔たりを経た幕開けであります。この一幕のみで終わることがないよう祈りながら、皆様、ごゆるりと、ごゆるりと、お楽しみ下さいませ」

第2 - A話 発端 - はじまり -

2014 Aug 27th

東京都江東区特別指定港湾地区・在原家別邸《翠鳴館》。

727震災後に開発された、東京湾に浮かぶ巨大な人工島の面積の大半を占める広大な邸宅。魔術という学術分野が広く認知されて四半世紀を待たずして、魔術と工学を融合した魔導工学メーカー^{あり}在原重工^{はらひろう}の創業者、在原匡都^{まさと}の別邸だ。

一代にして巨万の富を築いた稀代の天才が、その一人息子の養育のために建てた邸宅だった。魔術師の育成のために必要な設備を整えた施設や一般的な規模の蔵書を有する図書館、一般にも開放する緑地整備を施された公園など、その規模は世界でも有数と名高い。建造物としての意匠も名高く、国内外に名を知られる有数の観光地だ。

その大邸宅内にある緑地の一角。木蔭のかかるベンチに座る、人影があった。

短髪の少年だ。カーゴパンツに白いポロシャツという極めてラフな格好に、銀色のチェーンネックレスを首にかけている。

ベンチの背もたれに身を預け、少年は深いため息をついて頭上を見上げていた。日差しを程よく遮る緑の茂りと海から吹く風があるものの、間違いなく猛暑と呼んで間違いのない天気だ。

運命はかくも残酷なものなのか。それが少年 在原星治^{せいじ}の今の心境だった。同時に彼は、時の流れに残酷さを感じていた。

夏休みが終わるまで、あと二日を切った。だが、渡された課題は全くと言っていいほど進んでいない。むしろ、配布された当日のまま汚れることなくこの日を迎えている。

そのことを伝えた直後の、幼馴染の冷えた声を思い出した星治は、両手で頭を抱え込んだ。なぜ計画的に少しずつでもやらなかったの

か、そもそもあんなに遊んでる時間があつたのに何をやっていたのか、などという非常にもつともな指摘を十五分以上に渡って電話口から聞かされたことを思い出したのだ。

邸宅の雑務を受け持つ執事にも相談したが、自業自得だという一言で片付けられてしまった。車の運転から家計と呼ぶには巨額過ぎるだろ屋敷の予算、更には本家とのやり取りをもすべて一人でこなす執事なのだ。たかが課題程度と思つて頼んだ星治の申し出を、執事はにこやかに、しかし即座に拒絶した。

このようなことは自分の友人に頼むべきだという提案に沿い友人を呼んだはいいものの、夏休みの課題をまともに進めているだろう人間など彼の友人には一人しかない。

課題を進める気にもなれず、呆れながらも手伝ってくれることを約束してくれたその一人であり幼馴染でもある少女の到着を、星治は公園で待つていた。日差しこそ暑いものの、木陰に入っていれば風もあるためか涼しく感じられる。

まあ、顔を合わせたと同時にお説教タイムになるんだろうが

……

世話好きな性格からか後輩たちからも懐かれているが、自分に関しては殊更に

人の気配を感じ、星治はベンチから立ち上がって軽く伸びをし、文句をつけてくるであろう幼馴染がいる背後へと振り返り

「はじめまして」

気配は気のせいだったのだろうか。ならばなぜ、声がするのだろうか。初めて聞く、幼さが残るものの澄んだソプラノが響き、しかし声の主はどこにもいない。

「ここよ、ここ。ほら」

シャツの裾を引っ張られる先　視線を下げれば、そこにいたのは小柄な少女　というより、幼女、だ。背中まである長いブロンドをバレッタでまとめ、大粒のサファイアを思わせる深い瑠璃色の瞳がまっすぐに星治を捉えていた。

私有地とはいえ、一般に開放されている区画だ。誰が居ようと不思議ではない。加えて今ではブロンドに青い瞳の外国人がどこにいてもそう不思議なことではない。しかし、それでも幼女が存在は異様だった。細いシルエットのモードスーツを自然に着こなす雰囲気からして年齢からかけ離れた雰囲気がある。

「何を呆けているの」

「え、あ、ああ」

状況が把握できない。混乱する中で星治が理解できていたのは、彼女がその外見に反して非常に流暢な日本語を操ることと、やはり外見からは予想もできないほどにませた言葉づかいをするという二つのみ。

「なら、もう少し毅然となさいな。仮にも、あの在原匡都の息子なのでしょう？ 加えて日本分院でも指折りの魔術師なのだから、それに相応しい毅然とした態度を身につけなさい」

初対面の日本がやけに上手い青目にブロンドの幼女に、高圧的でもない妙に説得力のある言葉でいきなり真正面から態度を否定されているという状況に、星治の頭は更に混乱していく。

問題の幼女と言えば、先ほどから星治を淡々と観察するように見つめているだけだ。侮蔑や好意と言った何らかの感情は、その眼の色からは読み取れない。

その彼女が、不意に後ろを見やる。

「ほら、待ち合わせの相手が来たみたいよ」

言われて星治が向けた視線の先。彼が待ち合わせていた幼馴染の姿があった。

「何よ星治、迷子の子？ すごいおしゃれなお洋服ね、お名前を聞かせて？」

完全に年相応の少女と判断した幼馴染の言葉に、幼女は、

「初見の子どもに対する言葉がけとしては及第点というところね。名前はリゼリア・セルバレル、明日からあなた達二人を学院で教えることになった魔術師よ」

とんでもないことを言っただけなのであった。

第2 - B話 発端 - はじまり -

何度来ても、この広すぎる応接室に慣れることはない。それが冴山飛彩の率直な感想だった。

国内外を見渡しても競合と言える存在がないほど突出した力を持つ複合企業、ASI。その会長が息子のために作った人工島と、その人工島を全て使った大邸宅。翠鳴館の通称と呼ばれ、敷地内の一般開放された施設は近隣にも利用される観光名所でもある。

彼女がいるのは、本来ならば客賓を歓待するために作られたであろう一室だ。幾度となくここには来いるが、それでも慣れることはない。

供された紅茶を一口含み、飛彩は一つ息をつく。

さっきの子。リゼリアって言ってたっけ。

魔術学院の魔術師で、しかも明日から飛彩と星治を教えるのだという。あの年頃であの言葉や身振り手振りが演技だったのであれば間違いなく俳優養成の施設に行くべきだろうが、あの蒼い瞳にはそのような作られたものはなかったように飛彩は思う。

今はそのリゼリアと星治、そして在原家の家令を務めるメイベリンを加えた四人が応接室のテーブルを囲んでいた。供されるのはダージリンの紅茶とスコーンだが、両方とも絶品と言うほかない味だ。紅茶のカップを傾けながら、リゼリアは表情を少し綻ばせる。

「茶葉を選ぶ目は確かなようね。この時期にアリヤのこれだけ素晴らしい茶葉を味わえるとは思わなかったわ」

言葉こそ尊大に思えるが、その言葉を受けた家令　メイベリンは浅い一礼を返した。

「その言葉、従者冥利に尽きるよ」

「スコーンも貴女が焼いたのかしら。だとすれば相当に出来る従者ね、誇っていいわ」

「……だそつだ、星治。もう少し私の価値を再認識したらどうだ」

肩をすくめておどけて話すメイベリンの視線の先には、腕組み顔をしかめている星治の姿があった。

視線はまっすぐにリゼリアを見据えている。射抜くような鋭い目であり、親しみのような感情はほとんどない。本来の彼がするような目ではない。

理由の察しは簡単についた。恐らくは、彼の父　在原匡都が関係しているのだろう。

「なぜ私が在原匡都を知っているのか、かしら。貴方の考えている質問は」

自分にかけられた言葉なのかと思いい顔を上げた飛彩の視線の先には、余裕の笑みをたたえるリゼリアがいた。見た目こそ十二に届くかどうかという幼い少女だが、その笑みや目にはまるで捉えどころのない老獪さが見え隠れしている。

この手の得体の知れなさは、腕のある魔術師であればさほど珍しいことでもない。事実、学院に在籍する教官の魔術師にも同じような底知れない教官が数人はいるのだ。目の前のリゼリアもまた、見た目とはかけ離れた経験と研鑽を積んだ魔術師と考えるのが妥当だろう。

「答えはそのうち貴方もわかるわ」

「星治、今夜から彼女にはこの屋敷に泊まってもらうことになった。部屋は別に余っているし、じきに彼女に教えを請うことになるのだから問題はないだろう?」

「ち、ちよつと待てよメイ! 俺はそんな話聞いてないぞ!? いつどこでそんな話が決まった!」

「先日、とある国で軍事動乱が起きた。魔術師達を束ねている学院の総本山がある国だ。そこから亡命してきた位の高い魔術師をこの屋敷で保護するリターンとして、彼女は今日から君の魔術の師となる。形上は分院の臨時教官ではあるが、な。見た目に騙されると痛い目に合うぞ。何せ、腕よりの集まりで知られる本院でも五本の指に数えられる魔導だからな」

狂言であるとしても手が込みすぎているが、やはりどこか信用ならない。それが飛彩の抱いた感想であった。確かにリゼリアのやり取りや雰囲気からして普通でないのはわかるが、それがそのままメイベリンの発言の内容につながるとは考えられない。

加えて、本院の五本指に上がる魔術師というのも信じがたいことだ。五人揃えば一つの国家にも匹敵するという話自体が眉唾ものだが、目の前の少女がその一角を担う魔導なのだという。

「信じられない、という顔をしているわね」

軽く笑ってリゼリアは星治を見た。

「当たり前だろ。どうやって信じろって言うんだ。まさか、俺がこの手でお前をねじ伏せて、はいウソでしたってやりやあいいのか？」
「そうね、それ一番早いんじゃないかしら。この手で捻り潰してあげれば、貴方も納得せざるを得ないでしょう？」

相対する二人を見て、リゼリアの言葉に飛彩は少しずつ信憑性を感じ始めていた。

「なら決まりだな。模擬戦をやって彼女の言葉がすべて狂言か、試してみればいい。二人とも、室内訓練場で手合わせを試みる。星治は得物も忘れるな。彼女はお前が思っているよりよっぽど手強いぞ」

すべて見透かすようにして仕切るメイベリンに違和感を覚えながらも、飛彩も室内訓練場へと歩みを向けた。

目の間にいる少女は、完全に丸腰だった。

対する星治はと言えば、自らの野太刀　銀の煌めきも美しい業物　を下段に構え、真っ直ぐに少女を見据えていた。

一辺二百メートルに及ぶ巨大な室内訓練場。在原匡都がその息子

のために作った数多くのものの一つである。空間戦闘の習得のために天井は極めて高く作られており、壁面には衝撃緩衝に優れた防壁が張り巡らされている。

握る柄に汗が滲む。じり、という僅かな足の運びとともに踏み込みの刹那をうかがうが、契機を得られずにただ時間だけが刻々と過ぎていくのだ。およそ六メートル半の間合いを常に保ったまま攻防の動きはない。

頭の中に描いていた戦いの流れとはまるでかけ離れている。日本分院でも指折りの魔術師と名高い彼が、丸腰の子供相手に攻めあぐねているのだ。

「どうしたの？ 撃てば届く距離よ？ それとも私が怖いのかしら」
くすくすと笑みをこぼす様子は、侮蔑に他ならない。だからこそ、星治は踏み込んだ。

後ろにある右足の強い蹴撃。その蹴撃が捉えたのは訓練場の床だった。強烈なその踏み込みが生んだ運動エネルギーが、彼に与えたのは弾丸の如き初速。

下段に構えた野太刀が突き出される。刃ではなく、峰での一撃。リゼリアの左腕を狙う一撃必倒の一太刀。速さ、威力ともに申し分ない一撃だ。

当たれば無事では済むまい。骨は折れ、力の入り具合によっては肉も裂けておかしくない。だが、それほどの力でなければならぬという強迫めいた何かが、星治の動きを加速させていた。

柄を握り締める掌に来るであろう反動を予感した星治が、何も刀を抜くほどでもなかったのではないかと思ったその時だった。

「ッ！？」

手応えはない。それどころか、リゼリアの姿さえ掻き消えた。

「随分とまた暢気な剣ね。それで私を制することが出来るとでも？」
声に応ずるように放たれた二撃目。左足を軸にして竜巻を思わせる速度で旋回し、その速度を乗せた剣が少女の声の元へと走る。

そこにいた。星治の右方、あの一撃目の速度に反応して回避した

のだ。

見てくれに騙されるな。アレは子供の皮を被った、手練れの魔術師だ。その判断と共に放たれたのは一撃目ほどではないが、それでも疾風の如き速度を持った剣だった。

しかし、リゼリアはそれより速く動いていた。右の手で銃のような形を作り、人差し指の先から 身の毛もよだつような緻密な魔力子が圧縮されていく。

アレがもしも、攻撃の意思を持って放たれればどうなるか。一瞬で汗が噴き出る感覚に星治は少女の顔を見る。

笑って、いた。

間違いない。彼女はこの力を自らの力として完全に使役している。力を恐れることなく支配し、その一端を今星治に向けて放とうとしているのだ。

「速く、正確ではあるけれども未熟ね」

言って一つの動作を取る。

指の音。リゼリアが鳴らした指の音だ。それが、星治に下された死刑宣告の音色だった。

音と同時に、放たれた衝撃が星治の全身へと襲いかかる。全身をくまなく金槌で打ちのめされたような激痛とともに、彼はその場に膝をついた。辛うじて意識は保てているが、それだけだ。

不可視にして無音、そして全方位から同時に放たれた打撃のような感触。打ちのめされた五体は悲鳴を挙げ、口の中は鉄の味で満たされている。

その様を見たりゼリアが僅かに目を見開き、興味をひかれたように笑みを浮かべた。

「まだ意識を保っていられるのね、大したものだわ。並みの怪異であれば塵一つ残らない式だったのだけだ」

意識の有無はリゼリアの側からはわからない。だが、その闘志に敬意を表するように、リゼリアは止めの一撃である式を紡ぐ。

指を弾く動作。ぱちり、という乾いた音が、星治の間近 彼の

顎の真下で異変を結ぶ。

先の激痛のカラクリを、星治は直感で理解した。

打ちのめされたのだ。比喻ではなく、不可視の力によって。恐らくは、術式行使者の手指の形を元に発生するもので、威力は既に彼自身が味わっている。

攻撃の姿は見え、音もせず、ただ破壊の形跡だけを目標に記す。攻性魔術屈指の高階位魔術。抗う術など、ある筈もない。

そして、顎先に感じる強烈な打撃。脳を直接揺さぶられるような感覚を味わいながら、星治の意識は宙へと放り出された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7342a/>

響奏のレコンキスタ -Avenger on the A-

2010年10月8日14時20分発行